

主 題：偽教師たちに惑わされるな② 彼らをさばかれた主
 聖書箇所：ユダの手紙 5-7節

にせ教師たちが教会の中に入り込んで来ました。彼らの使命は偽りをもって人々を惑わすことでした。まさにそれは彼らの主人であるサタンが望んでいたことです。イエスが言われたように、「悪魔は初めから人殺しであり、真理に立ってはいません。彼のうちには真理がないからです。彼が偽りを言うときは、自分にふさわしい話し方をしているのです。なぜなら彼は偽り者であり、また偽りの父であるからです。」(ヨハネ8:44)の通りです。ですから、この偽りの教師たちは人々を惑わして人々が真理から遠ざかるように、もし、救われていないなら、決して真理に近づかないように、クリスチャンであるなら、真理から外れて偽りに惑わされるようにと働くのです。このような偽りの教師が教会に入って来たことを知ったユダは、愛する兄弟たちをこの偽りの教えから、また、いかなる惑わしからも守ろうと願うのです。そこで3節で見たように、ユダは真理のために戦うようにとクリスチャンたちを奨励します。

どのようにして私たちは信仰の戦いを戦い続けていくのか？そのことをユダは5節から教えています。5節「あなたがたは、すべてのことをすっかり知っているにしても、私はあなたがたに思い出させたいことがあるのです。それは主が、民をエジプトの地から救い出し、次に、信じない人々を滅ぼされたということです。」「すべてのことをすっかり知っているにしても、」とありますが、この「知っている」という動詞をユダは完了形で記しています。つまり、彼らは「その真理を過去に知ってそれを今も信じ続けている」ということです。ユダがこの後話していこうとする内容は読者たちがもう十分に知っていることです。そのことを先ずここでユダは教えているのです。

この後見ていくと気付かされるのは、ユダはそれぞれの出来事について詳しい説明をしていないということです。そのことから読者たちは出来事をよく知っていたことが分かります。もうすでに彼らが知っていることですが、ユダは「私はあなたがたに思い出させたいことがある」と言います。二つの動詞があります。「思い」と「出させたい」です。ユダが願ったことは、彼らに何度もこのすばらしい真理を思い起こさせたいということです。「出させたい」という動詞は現在形です。ですから、ユダ自身がそのことを継続して行っていたのです。何度でも読者たちに真理を語って、それによって彼らを励ましていきたいと願ったのです。

ということは、いろいろな間違った教えが入って来る中であって、あなたが信仰者として自分を守っていくために必要なことは、神の真理を忘れないことです。神は私たちにみことばを与えてくださった。これが神のおことばであり神の真理です。いろいろな人間の考えがあっても、私たちはこの神のおことばに立たなければいけません。ということは、皆さんの責任は、こうして毎週みことばを聞いて、それが本当に神のメッセージかどうか、みことばに基づいたものかどうか、そのことを吟味しなければならないことです。いろいろな本を読んだり、様々な人の話を聞くとときに、それが神のおことばに沿っているのかどうか？そのことを吟味しなければいけません。そのためにも私たちは常に「みことば」という神の真理に立ち続けて行くことです。何度でも思い出しながら真理に立ち続けていくことです。

ユダはそのことを教えようとするのです。私たちは注意しなければいろいろな教えに惑わされてしまうからです。今でも思い出します。かなり前のことですが、ある人が「私はこんなことを信じます」と言われたことがあって、それは「信仰生活の中で聖霊のバプテスマを受けなければならない」というもので、私たちの教会で教えることではなかったのです。残念ながら、その方はだれかと交わっているうちにその教えに染まってしまって、結果的に教会を離れることになりました。感謝なことに、私たちの群れにはそのようなことは余りなかったのですが、もう何十年も前のことでも今でもそのことを忘れることができません。なぜ、そのような教えに惑わされてしまったのか？大変悲しいことでした。ですから、これはユダと読者だけのことではありません。どの時代でもどの場所でも、私たちひとり一人が考えなければいけないことです。しっかりと真理に立つことです。

このことはペテロも教えています。Ⅱペテロ1:12「ですから、すでにこれらのことを知っており、現に持っている真理に堅く立っているあなたがたであるとはいえ、私はいつもこれらのことを、あなたがたに思い起こさせようとするのです。」、ペテロもユダと同じように、信仰の聖さ、純潔さを守り続けるためには、真理を忘れないことがカギだと言います。神が何を言われているのかを忘れてはいけません。

☆歴史上の事実とその教訓

今日のテキスト5節の続きには「それは」という接続詞があります。この接続詞が表わしていることは、この後ユダが話していく内容は「実際に起こった出来事だ」ということです。もちろん、皆さんもこれ

らの出来事が実際に起こったということはもうお分かりのことです。ユダはこの後、三つの出来事を記していきます。結論を言うと、三つの出来事、すなわち、三つのさばきをユダが教えるのですが、このことを通して彼が読者に伝えたかったことは、「真理に背を向ける者たちには必ず神のさばきが伴う」ということです。5節の後半には「イスラエルの民に対するさばき」、6節には「天使たちへのさばき」、そして、7節には「ソドムとゴモラに対するさばき」が記されています。これは時系列に並んでいません。なぜなら、先に言ったように、読者たちはこれらの出来事をよく知っていたからです。5節に「すべてのことをすっかり知っている」とあった通りです。

ですから、ユダは時代とともにどのようなことが起こったのかではなく、彼らがよく知る三つの出来事をもう一度思い起こさせることによって、読者たちを励まし、彼らがしっかり真理に立って歩いていくようにと、そのことを願ってこれを記すのです。過去の出来事、こういうことが起こった、だから、しっかりとそれを覚えて今日生きていきなさいと、過去の出来事を使いながら今の歩みを励まそうとするのです。このようなやり方はユダだけではありません。パウロも同じような手法を使って読者たちを励まそうとします。例えば、1コリント10：9－11をご覧ください。過去に起こったこと、イスラエルの民のことを話します。「：9 私たちは、さらに、彼らの中のある人たちが主を試みたのにならって主を試みることはないようにしましょう。彼らは蛇に滅ぼされました。」、思い出してください。イスラエルの民が神に逆らったとき、神は猛毒の蛇を送られそれに噛まれた者は死に至りましたが、モーセが青銅の蛇を作ってそれを仰ぎ見たときその者は救われたと、そのことをパウロは記しています。「：10 また、彼らの中のある人たちがつぶやいたのにならってつぶやいてはいけません。彼らは滅ぼす者に滅ぼされました。」、そして11節「：11 これらのことが彼らに起こったのは、戒めのためであり、それが書かれたのは、世の終わりに臨んでいる私たちへの教訓とするためです。」と。パウロも過去に起こった出来事を引き合いに出して、この出来事から学ぶべきだ、同じことを繰り返してはならない。彼らは神の前につぶやいた、神のことばを信じなかった、その結果、彼らにこのような報いが及んだ、そんなことがあなたに及ばないようにと言うのです。

「ヘブル人への手紙」の著者も同じようなことを記しています。ヘブル3：7、8「：7 ですから、聖霊が言われるとおりです。「きょう、もし御声を聞かならば、：8 荒野での試みの日に御怒りを引き起こしたときのように、心をかたくなにしてはならない。」と、15節にも「きょう、もし御声を聞かならば、御怒りを引き起こしたときのように、心をかたくなにしてはならない。」、4：7にも「神は再びある日を「きょう」と定めて、長い年月の後に、前に言われたと同じように、ダビデを通して、「きょう、もし御声を聞かならば、あなたがたの心をかたくなにしてはならない。」と語られたのです。」と、同じことが繰り返されています。「学びなさい!」という警告です。3：12には「兄弟たち。あなたがたの中では、だれも悪い不信仰の心になって生ける神から離れる者がないように気をつけなさい。」とあります。心を頑なにした者たちがどんなさばきに至ったのか、彼らがどのような運命を辿ったのか、そのことをしっかりと覚えていなさい。過去の教訓から学びなさい。それを忘れてはならないと、そのことを聖書の著者たちは私たちに教えてくれるのです。ユダもここで「過去の教訓を忘れてはならない」ということを言います。そして、彼は三つのさばきをここに記しています。その一つ一つを順番に見ていきましょう。

1. イスラエルの民へのさばき 5節後半

5b節「それは主が、民をエジプトの地から救い出し、次に、信じない人々を滅ぼされたということ。」、この「次に」という接続詞に注目してください。これは「二番目に」という意味です。ということは、一番目があるということです。この5節の後半には二つの出来事をユダは記しています。一つ目は「救い」、二つ目の出来事は「さばき」です。イスラエルの民に起こった「救い」と「さばき」をユダはここに記しているのです。この救いのことはもう皆さんが十分に知っていることです。出エジプト記12章から15章に書かれていることです。

・「救い」：ここで言われている「救い出し」は霊的な意味の救いではないことはお分かりですね。これは実際に奴隷とされていたイスラエルの民がそこから解放されたということです。

・「主のさばき」：信じない人を滅ぼされたということです。

神はあのイスラエルの民をエジプトの奴隷だった彼らを、そこからすばらしい神のみ力をもって解放してくださった。でも同時に、このイスラエルの民を見る時に、神のことばを信じなかった彼らに対して神からのさばきが下ったことが記されています。「信じない人々を滅ぼされた」というこの「信じない」ということばの前には否定語が付いています。そして、その後の動詞の時制は不定過去です。アオリストと言いますが、アオリスト分詞がその後に来ているのです。このような並び方をする時には文法的に「ある特定の出来事」を指します。繰り返しますが、読者たちはユダが言わんとすることをちゃんと理解していました。そして、今の私たちは聖書を学んでいます。聖書を読んでいますから、どんな出来事なのかが分かります。ですから、詳しい説明は省略しますが、ここで言っている「さばき」はカデシュ

バルネアでのことです。出エジプト記12-15章は範囲が広いので、申命記1章をお開きください。モーセがその時の出来事を記しています。申命記1章19節から、カデシュ・バルネアにイスラエルの民がやって来たことが書かれています。その後、彼らは12人の斥候、スパイたちを約束の地に送り出すのです。そして、彼らがその地から果物を手に入れて戻って来ます。1:25「また、その地のくだものを手に入れ、私たちのもとに持って下って来た。そして報告をもたらし、「私たちの神、【主】が、私たちに与えようとしておられる地は良い地です」と言った。」、そして、26節「しかし、あなたがたは登って行こうとせず、あなたがたの神、【主】の命令に逆らった。」、28節には「私たちはどこへ上って行くのか。私たちの身内の者たちは、『その民は私たちよりも大きくて背が高い。町々は大きく城壁は高く天にそびえている。しかも、そこでアナク人を見た』と言って、私たちの心をくじいた。」、12人の斥候たちのうち10人は、あの町々を攻め上ることは到底できません、無理です、絶対に無理だと言ってイスラエルの人たちの心をくじいたわけです。29-30節「:29 それで、私はあなたがたに言った。「おののいてはならない。彼らを恐れてはならない。:30 あなたがたに先立って行かれるあなたがたの神、【主】が、エジプトにおいて、あなたがたの目の前で、あなたがたのためにしてくださったそのとおりに、あなたがたのために戦われるのだ。」、こうして私たちは主を信じて、主の約束を信じて前進すべきだと言ったにもかかわらず、32節「このようなことによってもまだ、あなたがたはあなたがたの神、【主】を信じていない。」と。そして、どうなったのか？ご存じのように、神が言われたことは必ずそうなるのだからそれに従おうと主に信頼を置いたヨシアとカレブ以外は、この約束の地に入ることができなかつたのです。20歳以上の人々はみな同じように滅んでしまったことがこの後に書かれています。

この出来事のことをユダは言うのです。なぜ、この人々が滅ぼされたのか？ 彼らは出エジプト以降凄惨な奇蹟を経験して来ました。神のみわざを実際に見て来たのです。しかし、彼らは約束の地に攻め上れという神の命令に対してそれを受け入れようとしなかつた。自分たちの目で見て自分たちの耳で聞いたことを信じたのです。彼らは自分たちが見て、攻め上れるのかどうか勝利できるのかどうかを自分たちで判断したのです。その結果、彼らは神のさばきを受けたのです。だから、ユダは言うのです。神のことばを信じなければ必ずあなたにその報いが来るのだと。

私たちの神はどんな神なのか、ユダが教えてくれます。それは救い主です。どんな束縛からでも救いをもたらすことのできるお方です。実際に奴隷となって苦しんでいたイスラエルをエジプトから救い出されました。もちろん、この箇所が言っているのは実際の出来事であつて霊的なことではありません。でも、少なくとも私たちが分かることは、この方はどんな束縛からも解放される、その力があるということです。罪の束縛からも解放することがお出来になる方です。そして、実際にその証人が私たちでしょうか？我々は罪の束縛から解放されたのです。私たちの行ないではなくて神の恵みによってです。ですから、確かに「神は救い主」です。

同時に、ユダが教えてくれたのはこの神は「さばき主」でもあるということです。どのような罪でも完全に公正にさばかれるお方です。ですから、主なる神というのは、「さばき」と「救い」のどちらも行える御力と権利とを保持しておられるお方です。この方だけにその権利があるのです。救う権利があり救う力があり、そして、罪に対してさばきを下すその権利と力をもっておられるのです。

このイスラエルの民は神とともにエジプトから出て来ました。でも、悲しいことに、彼らは神が備えてくださったもの、その祝福を得ることはなかつたのです。だから、ユダは言うのです。「惑わされてはいけな。真理から離れるようなことがあつてはならない。もし、そのようなことになれば必ず主の懲らしめがあなたに訪れる。イスラエルの民がどんな歩みをしたのか、どんな失敗をしたのか、そこから学びなさい、しっかりと真理に立ち続けていくように。」と。

2. 天使たちへのさばき 6節

二つ目は「天使たちへのさばき」を使つてのレッスンです。6節にそのことが記されています。「また、主は、自分の領域を守らず、自分のおるべき所を捨てた御使いたちを、大いなる日のさばきのために、永遠の束縛をもって、暗やみの下に閉じ込められました。」、イスラエルの民から天使たちのことに話が展開します。

1) 天使たちの罪

ここには天使たちが犯した二つの罪をユダは記しています。彼らが「しなかつたこと」と彼らが「したこと」の二つの罪です。彼らは「自分の領域を守らず」とするべきことをしなかつた。そして、「自分のおるべき所を捨てた」としてはならないことをしたのです。

(1) **自分の領域を守らず** : 彼らがしなかつたこと。皆さんに見ていただきたいのは「守らず」という動詞です。これは「本来は彼らが守るべきものだったが、彼らはそれを守らなかつた」ということを言っているのです。何のことか？「自分の領域を」と書かれています。神は天使たちを創造された時に彼らのために彼らが存在する特別な場所、領域を与えたのです。神から与えられた特別な場所です。私たちは天と言つたときに、それは一つではないことを知っています。第三の天は「神がおられるところ」

とされています。もちろん、神はどこにでもおられますが、第二の天は星があってそこに天使たちもいるとされています。ですから、エペソ6章の中で私たち信仰者の戦いについて、6：12「私たちの格闘は血肉に対するものではなく、主権、力、この暗やみの世界の支配者たち、また、天にいるもろもろの悪霊に対するものです。」とパウロはこのように記しています。ですから、ユダが言っていることは、天使たちに与えられたその領域を彼らは守ろうとしなかった。本来ならそこに留まり続けるはずなのに、彼らはそうしなかった、そこから出て来たということです。

(2) 自分のおるべき所を捨てた： 今度は彼らが実際に行ったことです。「捨てた」とは「意図的に捨てた」ということです。彼らは意図的に天を捨てるという選択をしたのです。ある領地から、また、ある領域から決定的に離れる、そこを捨て去るということです。「自分のおるべき所」とありますが、この「おるべき所」ということばのギリシャ語は「家、自分の家」という意味です。ですから、この6節でユダは「天使たちの罪」について語っているのです。彼らは自分たちの家、自分たちがいるべき家から意図的に離れたということです。自分たちの意志でその場所を捨てた者たちがいると。

彼らは何のためにそのようなことをしたのか？ 読者たちはもう十分に分かっていたのですが、皆さんも何度か読まれたことがあるでしょう？ 創世記6章です。確かにこの箇所は非常に難解で、いろんな解釈のある所であることに間違いありません。というのは、6：2「神の子らは、…」と書かれています。4節にも「神の子らが」とあり、いったい「神の子ら」とはだれなのか？ ある人たちはこれは人間を指していると言い、別の説もありますが、私たちはこの「神の子ら」とは「天使たち」であると解釈します。

憶えておられるでしょう？ ヨブ記1：6に「ある日、神の子らが【主】の前に来て立ったとき、サタンも来てその中にいた。」と書かれています。「神の子らが【主】の前に来て立った」と、明らかに人間のことでありません。「天使たち」です。そうするとこの神の子ら、天使たちがどんな罪を犯したのか？ 創世記6章ではそのことを教えていますが、今話している天使たちとは、罪を犯さなかった天使たちではなく、罪を犯した天使たち、「悪霊」たちのことだとお分かりですね。その悪霊たちはもうすでに神の前に罪を犯したのですが、その悪霊たちがもっと大きな罪を犯したわけです。創世記6：2「神の子らは、人の娘たちが、いかにも美しいのを見て、その中から好きな者を選んで、自分たちの妻とした。」、4節「神の子らが、人の娘たちのところに入り、彼らに子どもができたころ、またその後にも、ネフィリムが地上にいた。これらは、昔の勇士であり、名のある者たちであった。」、この悪霊たちは人間の男のからだをとって人間の女たちと生活し、そして、彼らの間に子どもが生まれたと、このような罪を犯したということです。

そこで彼らから生まれた子どもたちは、間違いなく、悪霊の影響を受けた子どもたちでした。だから、6：11から後を見ていくと、社会が大変堕落している様子が記されています。6：11「地は、神の前に墮落し、地は、暴虐で満ちていた。」と。うなずけることです。悪霊の影響を受けた子どもたちが社会に影響を及ぼしていくからです。もちろん、マタイ22：30には「復活の時には、人はめとることも、とつぐこともなく、天の御使いたちのようです。」と、天使たちは結婚することがないと確かに記されています。ですから、今説明したようなことは有り得ないという説もあります。しかし、私たちが見ているのは、そのような有り得ない、考えられないような罪を彼らが犯したということです。

2) 天使たちへのさばき

ですから、彼らは大変厳しいさばきを受けている様子が今日のテキスト6節に記されています。「…大いなる日のさばきのために、永遠の束縛をもって、暗やみの下に閉じ込められました。」、「大いなる日のさばきのために、」と彼らに対するさばきがやって来るのです。その時まで彼らは「永遠の束縛をもって、暗やみの下に閉じ込められました。」と言います。確かに、悪霊たちのことを考えると、先に見たエペソ6：12では「悪霊に対する戦いを私たちは挑んでいる」とそのようにパウロが言っていましたが、それはサタンも悪霊たちも今自由に働いているからです。でも、悪霊の中でその自由を持っていない悪霊たちがいることを教えているのがこの6節です。彼らは最後のさばきの時まで自由に活動しているのではなく、「閉じ込められている」と言います。

(1) 永遠の束縛をもって： 彼らはマタイ25章で教えるように「悪魔とその使いたちのために用意された永遠の火に入れ。」(25：41)、「永遠の刑罰に入り」(25：46)と、地獄に行くのです。その時まで彼らは永遠の束縛をもって閉じ込められているのです。この「永遠の」という形容詞のギリシャ語は、ここ以外ではローマ書1：20だけに使われています。ローマ1：20「神の、目に見えない本性、すなわち神の永遠の力と神性は、世界の創造された時からこのかた、被造物によって知られ、はっきりと認められるのであって、彼らに弁解の余地はないのです。」と、「神の永遠の力と神性は、」と訳されています。「永遠」ということばが使われていますが、この1：20の意味することは「神の力と神性は永遠に神のものであってそれは変わらない、神の御力も神が神であるということは永遠に変わらない」ということです。この「永遠の束縛」ということばが教えていることは「束縛、鎖を彼らは永遠に切ることができない、その束縛から逃れることも絶対にできない」ということです。捕えられている、自由が全くない状

態です。もちろん、そこには赦しはありません。

(2) 暗やみの下に : 神は光だと言われます。全く神から引き離された状態、何の希望もない、何の喜びもない、そのような状態です。

(3) 閉じ込められ : その状態に今閉じ込められて、その後、最後のさばきがあって、この悪霊たちは永遠の地獄へと真逆さまに落とされていくのです。「閉じ込められ」ということばが出て来ますが、これも完了形です。もうすでに閉じ込められて、その結果は今も継続しているということです。彼らは閉じ込められた状態で居続けているとユダは教えてくれます。今私たちが見ていることをペテロもⅡペテロ2:4でこのように言っています。「神は、罪を犯した御使いたちを、容赦せず、地獄に引き渡し、さばきの時まで暗やみの穴の中に閉じ込めてしまわれました。」と、同じことを言っています。悪霊の中でも特に罪を犯した者たちをこのように扱っていると言うのです。

何がこの天使たちの問題でしたか？彼らは神のみこころに逆らったのです。彼らは神のみこころに従うよりも自分の道を選択したのです。大きな罪を犯しました。そして、彼らにこのようなさばきが下ることが決定したのです。皆さん、主のみこころに逆らうなら必ずそこに懲らしめがあるということです。彼らの歩みを見た時に、彼らは自由に好きなことを選択しました。でも、そこには自分たちが受けるべき報いがありました。だから注意しなさいと言います。あなたや私の責任は神の真理に背を向けることではなくて、その真理に従い続けて行くことです。

3. ソドムとゴモラへのさばき 7節

7節「また、ソドム、ゴモラおよび周囲の町々も彼らと同じように、好色にふけり、不自然な肉欲を追い求めたので、永遠の火の刑罰を受けて、みせしめにされています。」、ユダはここで、ソドムとゴモラと周辺の町々もさばかれるのですが、その理由はやはり「罪」だと言っています。しかも、この人たちの罪は大変驚くばかり汚れたものでした。創世記18, 19章にこのことが書かれています。今は全部を見ませんが、18:20に「そこで【主】は仰せられた。「ソドムとゴモラの叫びは非常に大きく、また彼らの罪はきわめて重い。」とあります。彼らはどんな罪を犯したのか？創世記の中では19章1節から記されていますが、今見るのは「ユダの手紙」です。ここには特に二つの罪が記されています。

1) 好色にふけり : 好色の罪、つまり、性的な罪を犯したということです。性的不道徳を働いていたのです。もちろん、悲しいことに、クリスチャンでもそのような罪に陥ります。ここには「ふけり」と書かれています。つまり、彼らはそのような性的不道徳を自分から求めそれを楽しんでいたのです。それが彼らの問題です。彼らはそれを愛していた。本当に性的に自由で好きなことをしても構わないと、そのような生き方をしていた人たちです。

これだけでもその生き方は神のみこころに反したものです。でも、実は、彼らはそれだけではなかったのです。次のことを見てください。

2) 不自然な肉欲を追い求めた : この「不自然」と訳されている形容詞は新約聖書の中に98回出て来ますが、「不自然」と訳されているのはここだけです。このことばの意味は「普通ではない」ということです。つまり、ソドムとゴモラとその周辺の町の人たちが行っていたことは、普通ではない性的関係です。それに関わって行っていたということです。神が命じておられるその命令にその教えに全く反して、彼らは罪の中にいたということです。彼らの罪は「同性愛」です。今の世の中はすべての人に寛大であろうと言います。もちろん、私たちはすべての人を愛してその人たちに救いのメッセージを語り続けていきます。

しかし悲しいことに、今の世の中は「同性愛」というのは罪ではなく、生まれつきそのように生まれたのだと、それを正当化する動きがあります。人々が何を言おうと、このことについて神は何と言われているのか？「それは罪だ」と言っています。レビ記をご覧ください。18:22-26「:22 あなたは女と寝るように、男と寝てはならない。これは忌みきらうべきことである。:23 動物と寝て、動物によって身を汚してはならない。女も動物の前に立って、これと臥してはならない。これは道ならぬことである。:24 あなたがたは、これらのどれによっても、身を汚してはならない。わたしがあなたがたの前から追い出そうとしている国々は、これらのすべてのことによって汚れており、:25 このように、その地も汚れており、それゆえ、わたしはその地の咎を罰するので、その地は、住民を吐き出すことになるからである。:26 あなたがたは、わたしのおきてとわたしの定めを守らなければならない。この国に生まれた者も、あなたがたの間の在留異国人も、これらの忌みきらうべきことを、一つでも行うことがないためである。」と、聖書のみことばはこのように「同性愛は罪だ」と私たちに教えています。ローマ書1章でもそのことを私たちに教えています。人々が神を知ろうとしたがらないので、人々は自分の快樂のままに生き始めるとあります。まさに、ソドムとゴモラとその周辺の町々、そこに住む人々はこのような生き方を選択していたのです。もちろん、彼らにはさばきが約束されています。

3) 彼らへのさばき : 今日のテキストを見てください。7節の後半に「永遠の火の刑罰を受けて、みせ

しめにされています。」と書かれています。

永遠の火の刑罰 = それが「永遠の地獄」としてみことばに記されています。永遠の火の刑罰があること、消えることのないその永遠の火の中で、神に逆らい続けて来た者たちは苦しみ続けていくことが確かにみことばの中に記されています。

みせしめにされて = ユダはこのソドムとゴモラの町々に起こったこのさばき、それは「見せしめである」と言っています。この町に下った火の刑罰、これが「みせしめ」だと言うのです。この「みせしめにされています。」の「されています」は現在形です。今も変わらずそれが見せしめであり続けているということです。

ユダは、ソドムやゴモラや周辺の町々が経験したこの火によるさばき、これはまさに、すべての神に逆らう者たちが後に実際に経験することだと言います。このことを通して、神は罪を憎んでおられることを明らかにしただけでなく、その罰は必ず受けるということも明らかにした、そのことの見せしめ、実例なのです。「みせしめ」とは「実例、模範」という意味です。ですから、ソドムとゴモラを見た時に私たちが教えられることは、彼らの罪に対して神はさばきを下さされた、それは私たちも同じように神に逆らい続けているなら、必ず、神からさばきを受ける、それが模範だということです。あのソドムとゴモラへのさばきは、今の私たちに対しても神が罪を憎んでおられること、そして、罪にはさばきが下されることの実例として、今も私たちの前に示され続けていると、そのことを今一度、ユダは読者たちに思い起こさせて注意を促すのです。

イエス・キリストの救いを拒んでいる者たちに対して、あなたは今の生活が問題ないと思っているかもしれない、神を全く無視して生きているかもしれないけれど、必ず、あなたは神の前に立ってさばきを受ける日が来ると言うのです。

ユダが言うように、教会の中には偽キリストが入って来ます。教会の中には背教者もいます。どんな人々か？あたかもクリスチャンであるかのように振る舞っている未信者です。そういう人たちがいるのです。その人たちに対して神の警告があります。「あなたの罪は必ずさばかれる」です。なぜ、さばかれるのか？神の救いを拒んだからです。もっといけないことは、神の救いがあることを知っていながら意図的にその救いを拒むことです。だから、注意しなさいと言います。過去に起こったことは今を生きている私たちにとっての教訓です。そこから学ぶべきです。私たちの神とはどんな神なのか？どんなことを神が教え警告されているのか？です。そして、私たち信仰者も、どのように生きることが神の前に正しいのか？そのことを過去の出来事を通して学んで、そして、そのように今日生きることです。

神が私たちに求めておられることは、どんな間違った教えが入って来てもしっかりと神のおことばの上立つことです。信仰者の皆さん、あなたはもしかすると「私はこんなことを信じています」と言われるかもしれませんが。教理を覚えていて「わたしはこんなことを信じています」と言います。そうしてあなたは質問に答えることができるかもしれない。例えば、そのあなたに「なぜそれが真理だと言えるのですか？」と問いかけられたら答えられますか？

なぜ、異端はイエスを信じている人、聖書を勉強している人をターゲットにするのかを考えてみてください。聖書を信じていると言う人でも、まだそんなに深く根が張っていないから彼らを惑わすことができる。彼らは知っているのです。だから「聖書を学びませんか？」とやって来る人たちは、あなたが聖書を学んでいると言えば喜びます。騙せるからです。だから、私たちは真理に立たないといけません。聖書が何を教えているのか、私は何を信じているか、どうしてそれが真理だと言えるのか。私たちの信仰は人間の教えに立っているではありません。神の教えに立っています。だから、私たちは知らなければいけないのです。神が何を私たちに教えてくれているのかを…。それを知ることによって、あなたの信仰はしっかりと根付いてものになって、どんな間違った教えが入って来ても、それを見分ける霊的な判断力があり、そして、しっかりとそれらからあなた自身を守ってくれます。

ユダはそのことを信仰者たちに求めるのです。パウロもペテロも、そして、神ご自身もそのことを私たちに求めるのです。信仰者の皆さん、あなたの信仰は「薄く広く」でしょうか？それとも「しっかりと神のおことばに根付いている」でしょうか？そのような信仰者を目指すことです。そのためにはどうすれば良いのか？みことばを聞いてもすぐに忘れる人にならないことです。聞いたみことばを実践することです。そうして、あなたの信仰はしっかりと強固なものに変えられていきます。それが信仰の成長でしょうか？

神が求めておられる信仰者に変えられていくことです。みことばは私たちにどうすればいいのかを教えてください。そして、それを達成するための助けはすでに備えられています。問題は、あなたがそれを望むかどうかです。今日この日に「主よ、私はあなたが望む信仰者になっていきたい。どんな間違った教えにも惑わされなくて、あなたが喜ばれる、あなたが求めておられるような信仰者になりたい。」と、その願いをもってしっかりとみことばを学び、そのみことばの教えに従っていくことです。その時に

神があなたのうちに働きを始められます。そのようにして成長していくのです。そして、そのようにして成長していきましょう！それが私たちの神が求めておられることだから。